

昔むかし、みそさざいが、ひとりのお百姓ひやしやうに会いました。お百姓は、手伝てつだいの男やとを雇やといたいと探さがしているところでした。みそさざいは、

「ぼくでどう」とききました。

「おまえなんか、なんの役に立つんだ」

「やってみなくちゃわからないよ」

そこで、お百姓はみそさざいを雇やとうことにしました。

みそさざいは、お百姓の納屋なやで麦打ちをしていましたが、麦をひとつぶこぼしてしまいました。すると、ねずみが一匹やってきて、その麦を食べてしまいました。みそさざいは怒おこって、

「二度とそんなこと、させないぞ」といいました。

みそさざいは、また麦を打ちはじめましたが、今度は二つぶ麦をこぼしてしまいました。するとまたねずみがやってきて二つぶとも麦を食べてしまいました。みそさざいはかんかんかんに怒おこって、「どっちが強いかな勝負だ」といって、仲間なかまを十二羽よんできました。するとねずみも一族をひきつれてやってきました。みそさざいが、

「おまえ、一族みんなつれてきたな」というと、ねずみも、

「おまえだってそうだ」といって、前足をつきだしました。すかさず、みそさざいはその前足を、麦打ちの竿さおでたたき折おってしまいました。さあ、鳥たちとけものたちの戦争が始まりました。

さて、テハータウンに、ひとりの王子がいました。王子は、鳥とけものが戦争を始めたときいて、(どっちが勝つか見にいこう)と思おもいました。ところが、王子が戦場に着いたときには、戦争はあらかた終わっていて、大がらすとへびだけがまだ戦っていました。へびは大がらすの首にまきつき、大がらすはへびののどをくちばしでくわえていました。大がらすが負けそうになったとき、王子は刀をぬいてへびの首をちよん切きってしまいました。

すると大がらすは、

「お礼によいところへおつれしましょう。私のつばさのつけ根に乗ってください」といいました。

王子が大がらすのつばさのつけ根に乗ると、大がらすは、ひと飛とびで、九つのみね、九つの谷、九つの荒あれ野を越こえました。するとほるか遠とほくに小さな家が見えました。大がらすはいいました。

「あそこに妹が住んでいます。妹が『鳥たちの戦争を見ましたか』ときいたら、そうだと答えてください。そして、『私わたしに似たものを見ましたか』ときいたら、見たと答えてください。そうすればあなたを喜よろこんで迎むかえるでしょう」

大がらすは家のそばに王子をおろすと、

「では、明日の朝この場所に迎えにきます」といって、飛んでいきました。

王子が家の中に入っていくと、娘がいて、たいへんなもてなしを受けました。食べ物もどっさり、飲み物もたっぷり、足をすぐお湯にやわらかいベッド、いたれりつくせりでした。

つぎの朝、大がらすは迎えにくると、王子を乗せ、ひととびで六つのみね、六つの谷、六つの荒れ野を越えました。するとはるか遠くに小さな家が見えました。大がらすは王子をおろしました。王子が家の中に入ってくと、またひとりの娘がいて、たいへんなもてなしを受けました。食べ物もどっさり、飲み物もたっぷり、足をすぐお湯にやわらかいベッド、いたれりつくせりでした。

つぎの朝、大がらすは王子を乗せ、ひととびで三つのみね、三つの谷、三つの荒れ野を越えました。そして、また、王子を小さな家に連れていきました。王子はそこでも、たいへんなもてなしを受けました。

つぎの朝、やってきたのは大がらすではなくて、髪を金の輪でたばねたりっぱな若者でした。若者は、

「私が大がらすです。悪い魔法にかけられていましたが、あなたのおかげで人間にもどることができました。お礼にこの包みをさしあげます」といって、かかえていた包みを王子に渡しました。「来たときと同じ道を通ってお帰りなさい。妹たちの家にひと晩ずつ泊まってね。この包みは、あなたがいちばん住んでみたいと思う場所に着くまで開けてはいけませんよ」

王子は、若者に別れをつけ、来たときと同じ道を帰っていきました。

ずいぶん歩いて暗い森までやってきました。王子は、包みが重くなってきたように思われたので、中を見てやろうと思いました。包みを開けたとたん、目の前にすばらしい宮殿と庭園と果樹園が現れました。王子がびっくりしていると、森の奥から巨人があらわれ、

「とんでもない場所に家をたてたもんだなあ」といいました。

「こんなところにたてるつもりはなかったんだ」と、王子がいうと、巨人は、

「もし、この宮殿を包みの中にもどしてやったら、何をくれる」とききました。

「何がほしいんだ」

「そうだなあ、おまえの最初の息子だ。その子が七歳になったら、わしのものにする」

「ああ、もし息子が生まれたらおまえにやるよ」

王子がそういったとたん、宮殿は、庭園と果樹園もろとも包みの中におさまりました。

「さあ、もどしてやったぞ。約束をわすれるな。おまえがわすれても、おれはわすれないからな」巨人はそういうと森の奥へ消えました。

王子は旅をつづけました。父の城の近くまでもどってきたとき、やっと住んでみたいと思う場

所を見つけました。包みを開けると、前と同じすばらしい宮殿と庭園と果樹園があらわれました。宮殿の中に入っていくと見たこともないほど美しい娘むすめがいました。王子は娘と結婚けっこんし、やがて父の王さまがなくなると、国をつぎ、新しい王になりました。

やがて新しい王さまには、息子がひとり生まれました。

七年と一日がたった日、巨人が城にやってきて、

「約束どおり、息子をわたせ」といいました。王さまとおきさきは、料理人りょうりにんの息子に王子の服を着せて巨人にわたしました。

巨人は、その男の子をつれて歩いていきましたが、しばらく行ったところでその子に杖つえをわたして、

「もしおまえの父親がこんな杖を持っていたら、何をするか」とききました。

「もしぼくのお父さんがこんな杖を持ったら、いぬやねこをなぐるよ。王さまのごはんに近づかないようにね」

巨人は、

「ではおまえは料理人の子だな」というと、男の子の足首をつかんで石に打ちつけてしまいました。そしていかりくるって城にもどると、王の息子をわたさなければ城をぶっこわしてやるといいました。

王さまとおきさきは、こんどは執事しゅっしの息子に王子の服を着せて巨人にわたしました。

巨人は、その子をつれて歩いていきましたが、しばらく行ったところで杖をわたして、

「もしおまえの父親がこんな杖を持っていたら、何をするか」とききました。

「もしぼくのお父さんがこんな杖を持ったら、いぬやねこをなぐるよ。王さまの飲み物に近づけないようにね」

巨人は、

「おまえは執事の子だな」というと、男の子の頭をたたきわってしまいました。そしてかんかんにいかりくるって城にもどると、

「王の息子をわたせ。さもさないと城をぶっこわしてやるぞ」といいました。王さまとおきさきは、息子をわたすほかありませんでした。

巨人は、その子をつれて歩いていきましたが、しばらく行ったところで杖をわたして、

「もしおまえの父親がこんな杖を持っていたら、何をするか」とききました。男の子は、

「お父さんはもっとりっぱな杖を持っているよ」といいました。

「ほう。そんなりっぱな杖を持ってなにをしているんだ」

「王のいすにすわってる」

そこで巨人はこの子がほんとうの王子だとわかり、家につれて帰って、自分の息子として育てました。

ある日、巨人がでかけていたときのこと、屋敷のてっぺんの部屋から美しい音楽が聞こえてきました。王子が見上げると、窓から美しい娘がのぞいていました。娘は手まねきして、

「私は、巨人の末の娘、オーバーン・メアリーです。今夜十二時にまたこの下へ来てください」といいました。

真夜中、王子が行くと、オーバーン・メアリーがいました。

「あした、父さんがあなたに、私のふたりの姉さんのうちどちらかを花嫁にするようにというでしょう。そうしたら、あなたは、どちらもいやだ、末の娘がいいといってください」

つぎの日、巨人は、三人の娘を王子の前につれてきていいました。

「デハータウンの王子よ、長いあいだいっしょにくらしてきたが、上のふたりの娘のうちどちらかを妻にするとよい。そうすれば、おまえを家に帰らせてやるぞ」

王子は、

「どちらもいやです。末のおじょうさんをください」と答えました。巨人は、腹を立てましたが、

「では、今からいう三つの仕事をやりとげるんだ。そうすれば末の娘をやるう」といいました。

巨人は王子を牛小屋につれて行き、

「ここに牛を百頭かっているんだが、七年間いちども小屋のそうじをしたことがない。わしが出かけているあいだにそうじしておけ。金のりんごが端から端までころがっても跡がのこらないくらいにきれいにするんだぞ。さもないと、おまえの血をみんな飲んでしまうからな」といいました。

王子は牛小屋のそうじを始めましたが、海の水をすっかりくみだせと命じられたほうがまだましです。昼がすぎ、あせで目もよく見えなくなったころ、オーバーン・メアリーがやってきて、「ひどい目にあってるのね。こちらへ来て少しお休みなさい」といいました。王子はオーバーン・メアリーのそばに腰をおろすと、そのまま眠ってしまいました。目がさめると、オーバーン・メアリーはいなくなっていて、牛小屋のそうじはすっかりすんでいました。金のりんごが端から端までころがっても跡がひとつものこらないくらいです。そこへ巨人が帰ってきて、

「そうじはできたか」とききました。

「ああ、すんだ」

王子がいうと、巨人は、

「ふん、ほかのやつがやったんだな」といいました。王子は、

「とにかくあんたがやったんじゃない」と答えました。

「いいだろう。あしたもその調子ではたらけ。こんどは、牛小屋の屋根を鳥の羽で葺^ふくんだ。同じ色の羽根を二本と使っちゃいかんぞ」

つぎの日の夜明け前、王子は弓矢を持って野原へ出かけていきました。けれども、鳥はなかなかつかまりません。昼がすぎ、あせで目もよく見えなくなったころ、オーバーン・メアリーがやってきて、

「もうくたくたね。この塚^{つか}の上で少しお休みなさい」といいました。王子は、オーバーン・メアリーのそばに腰をおろすと眠ってしまいました。目がさめると、オーバーン・メアリーはいなくなっていました。屋敷にもどると、牛小屋の屋根はすっかり鳥の羽で葺かれていました。そこへ巨人が帰ってきて、

「屋根は葺きおわたか」とききました。

「ああ、すんだ」

「ふん、ほかのやつがやったんだな」

「とにかくあなたがやったんじゃない」

「まあいい。さて、最後の仕事だ。向こうの湖のそばにモミの木があつて、そのてっぺんにかささがが巢^すをかけている。その巢の中に卵^{たまご}が五つあるから、その卵をとってこい。ひとつもわつてはいかんぞ」

つぎの朝早く、王子は出かけていきました。モミの木はたいそう高く、根元から最初の枝^{えだ}までが五百フィートもありました。とてもぼろることができず、王子は木のまわりをぐるぐる回るだけでした。そこへオーバーン・メアリーがやってきていいいました。

「ぐずぐずしてるひまはないわ。さあ、私をころして。そして、私の骨^{ほね}から肉をぜんぶはぎとつて、骨をみなばらばらにするんです。その骨をひとつひとつ木の幹^{みき}にくつつけながら、それを段々^{だん}にしてのぼるのよ。骨は幹にびたつとくつついて、けつして離^{はな}れませんか。下りてくるとき、足を乗せたあと手でさわれば、骨はすぐにはずれます。いいですか、どの骨にも足をかけてくださいね。そうしないと、骨は木の幹にくつついたままになってしまうから。私の肉はこの布^{ぬの}に包んで木の根元の泉^{いずみ}のそばにおいてください。地面に下りたら、骨を順^{じゆん}にならべて上に肉をおき、泉の水をかけるんです。そうすれば私は生きかえるから。でも、くれぐれも骨をひとつも木に残さないでね」

王子は、

「あなたを殺すなんて、ぼくにはできない」といいました。オーバーン・メアリーは、

「木に登るにはこの方法しかないの。そして、卵をとってこないと、あなたも私も殺されてしまう」といいました。

王子はしかたなくオーバーン・メアリーを殺し、骨から肉をはぎとって骨をばらばらにしました。そしてその骨を、木の幹にくっつけながらのぼっていきました。やっとてっぺんまでのぼると、巢の中から卵をとり、また、骨に足を乗せては、ひとつひとつはずしながら下りてきました。ところが、最後の骨があまりに地面に近かったので気がつかず、足を乗せませんでした。

王子は、骨を順にならべて肉をのせると、泉の水をかけました。たちまちオーバーン・メアリーは生きかえり、王子の前に立ちました。

「あなたは最後の骨に足を乗せなかったのね。私の小指の骨だったのよ」と、オーバーン・メアリーはいいました。そして、

「さあ、卵をもつて急いで帰ってください。今晚、父さんは、私とふたりの姉さんに同じ服を着せて同じかつこうをさせ、あなたに『おまえの妻はどれだ』ときくでしょう。あなたが私を見つけたら、私たちは結婚できます。ちゃんと私を選んでくださいね。小指のない手が目印です」といいました。

王子が屋敷にもどって巨人に卵をわたすと、巨人は、

「よし。結婚式の用意をしろ」といいました。

夜になるとおおぜいの巨人たちがやって来て、王子とオーバーン・メアリーの結婚式がにぎやかに行われました。宴会の後、巨人は自分の三人の娘に同じ服を着せ同じかつこうをさせました。そして王子に、

「さて、この三人の娘たちのうち、どれがおまえの妻だ」とききました。

王子はさしだされた三人の手から、小指のない手を選びました。

「おまえ、またうまくやったな。今度こそ見ておれ」と、巨人はいいました。

ふたりは寝室に行きました。オーバーン・メアリーは、

「大急ぎで逃げましょう。父さんはきつとあなたを殺すわ」といいました。

ふたりは、外へ出ると厩へ行き、青みがかった灰色の仔馬にまたがりました。オーバーン・メアリーは、

「ちよつと待って。仕掛けをしてくるから」といって、急いで寝室にもどり、りんごを九つに切りました。そして、ふたつをベッドの枕元におき、ふたつをベッドのすそにおきました。それから、ふたつを台所の入り口におき、ふたつを家の戸口におきました。そして、最後のひとつは家の外におきました。それからもどつてくると、ふたりは馬をとばして逃げだしました。

巨人は目をさまして、

「おまえたち、もう寝たか」と、声をかけました。すると、ベッドの枕元のりんごが、

「いいえ、まだよ」と答えました。しばらくすると、また巨人が、

「もう寝たか」と、声をかけました。すると、ベッドのすそのりんごが、
「いいえ、まだよ」といいました。しばらくすると、また、
「もう寝たか」

台所の入り口のりんごが、

「いいえ、まだよ」

「もう寝たか」

戸口のりんごが、

「いいえ、まだよ」

巨人は、

「おまえたち、なんだかだんだん遠ざかっていくな。もう寝たのか」といいました。こんどは、
家の外のりんごが、

「いいえ、まだよ」といいました。

「おまえたち、逃げるんだな」

巨人はさけぶと、ふたりの寝室にとんでいきました。ベッドはつめたくもぬげのからです。

「娘のやつ、だましやがった」

巨人はふたりのあとを追いかけました。

夜が明けるころ、オーバーン・メアリーの背せなか中が巨人のはく息あつで熱あつくなってきました。オーバ
ーン・メアリーは王子にいました。

「急いで、馬の耳に手を入れて、なんでもいいからうしろへ投げて」

王子は馬の耳に手をいれて、

「リンボクの木のある枝がある」といいました。それをうしろに投げると、たちまちふたりのうしろ
にいばらの森があらわれました。とても深く生いしげっていて、いたちでさえ通りぬけられない
ほどです。巨人は頭からいばらの中につっこみ、とげで頭や首の皮がむけてしまいました。

「また娘のやつだな。だが、わしの斧おのと刀があればこんな森なんかすぐに通りぬけられるぞ」巨
人は家にとってかえし、斧と刀を持ってきて、たちまちいばらの森を切りひらきました。そして、
「斧と刀はここにおいといて、追っかけよう」と、ひとりごとをいいました。すると、木の上で
かんむりがらすが、

「おいとくならおいときな。わしらでいただき、いただき」といいました。巨人は、

「おまえらがぬすむ気なら、家に持ってかえらないとな」といって、斧と刀を家に持って帰り、
またふたりを追いかけました。

真昼になると、オーバーン・メアリーの背中がまた巨人のはく息で熱あつくなってきました。



「馬の耳に手を入れて、なんでもいいからうしろへ投げて」

王子は馬の耳に手をいれて、

「灰色の石のかけらがある」といいました。それをうしろに投げると、たちまち幅も高さも二十マイルもある大きな灰色の岩が、ふたりの後ろにそびえ立ちました。巨人は岩に向かって突進とっしんしましたが、どうしても越えることができません。

「また娘のやつだな。あいつの魔法はまったく手におえん。だが、わしのはしごとつるはしがあれば、こんな岩なんかすぐに越えられるぞ」

巨人は家にとってかえし、はしごとつるはしを持ってきて、たちまち岩をくぐりて道をつけました。そして、

「はしごとつるはしはここにおいて、追っかけよう」というと、木の上でかんむりがらすが、「おいとくならおいときな。わしらでいただき、いただき」といいました。

巨人は、

「勝手にしやがれ。もうもどるひまなんてないわい」といって、ふたりを追いかけてきました。

真夜中になると、オーバーン・メアリーの背中が巨人のはく息で熱くなってきました。

「馬の耳に手を入れて、なんでもいいからうしろへ投げて」

王子が馬の耳に手を入れると、こんどは、水袋みずぶくろがありました。それをうしろに投げると、たちまち長さも幅も二十マイルもある湖が、ふたりの後ろに広がりました。巨人は、あんまりいきおいよく走ってきたので、そのまま湖のまんなかにとびこんでしまいました。巨人はずんずんずん、それっきり浮うかんできませんでした。

つぎの日、ふたりは王子の父の城の近くまでやってきました。オーバーン・メアリーはいいました。

「私はこの井戸のそばでまっています。あなたひとりでお城にもどり、お父さまに、私のようなものを妻にしたと話してきてください。でも、だれにもあなたにキスをさせないでね。キスされると、あなたは私のことをすっかりわすれてしまうから」

王子は城にもどっていき、大よろこびでむかえられました。王子は父と母にキスをしないでほしいといいました。ところが、年とつたいぬがとびついてきて、王子の口をなめました。とたんに王子はオーバーン・メアリーのことをわすれてしまいました。

オーバーン・メアリーは、井戸のそばで待っていました。いつまでたっても王子はもどってきません。夜になると、オーバーン・メアリーは井戸のそばのかしの木またにのぼって、木の股またにすわって過ごしました。

つぎの朝、靴屋くつやのおかみさんが井戸に水をくみにやって来ました。そして水にうつったオーバ

ーン・メアリーのすがたを見て、自分のすがたがうつっているのだと思ひこみ、あんまり美しいので、持っていたつぼを落として割わつてしまいました。おかみさんが水をくまずに帰ってきたので、靴屋は、

「水はどこなんだ」とたずねました。おかみさんは、

「なによ、よぼよぼおやじ。わたし、あんたの奴隷どれいじゃないわよ」といいました。

「何をいつてるんだ。じゃあ、娘や、おまえが水をくんできておくれ」

靴屋の娘は井戸へ行きました。そして、水にうつったオーバーン・メアリーのすがたを見ると、やっぱり自分のすがただと思ひこみ、

(私、こんなにきれいだったのかしら)と思ひながら家に帰りました。

「水はどこなんだ」と、靴屋がきくと、娘は、

「なによ、よぼよぼおやじ。わたし、あんたの奴隷じゃないわよ」といいました。

靴屋はこんどは自分で井戸へ行きました。そして、水にうつったオーバーン・メアリーのすがたを見つけ、かしの木を見上げました。すると、見たこともないほど美しい娘がいました。

「座つてるとこはぐらぐらだけど、お顔はみごとに美しい。下りてきて家に来ないかね」

靴屋は、娘をつれて帰り、養やしなうことにしました。

ある日のこと、靴屋は新しい靴をたくさん作りました。その日は、城の王子の結婚式があるので、靴を城にとどけることになったのです。オーバーン・メアリーは靴屋に、

「わたしも王子さまを見てみたい」といいました。靴屋は、

「それならついで。わしは城の召使めしつかたちと親しいから、王子さまやおえらいかたがたを見せあげよう」といいました。

お城の人たちは、オーバーン・メアリーがとても美しいので、王子たちのいる広間につれて行き、ワインをついでやりました。オーバーン・メアリーがワインを飲もうとしたとき、グラスから炎ほのおがあがって、金の鳩はとと銀の鳩が飛びだしました。二羽の鳩が広間を飛びまわっていると、床の上に麦が三つぶ落ちてきました。すると、銀の鳩がひよいと下りて麦を三つぶとも食べてしまいました。金の鳩は、

「私が牛小屋を掃除してあげたのを覚えてるなら、ひとつぶくらいのこしといてよ」といいました。

そこへまた、麦が三つぶ落ちてきました。するとまた、銀の鳩が食べてしまいました。金の鳩は、

「私が牛小屋の屋根を葺いてあげたのを覚えてるなら、ひとつぶくらいのこしといてよ」といいました。

また、麦が三つぶ落ちてきました。また、銀の鳩が食べてしまいました。金の鳩は、「私がかさぎの卵を取るのを手伝ってあげたのを覚えてるなら、ひとつぶぐらいのこしといえよ」といいました。「私は、あなたが下りてくるとき小指をなくしたのよ」

それを聞いたとたん、王子はすべてを思い出しました。王子は広間に集まっている人たちにいいました。

「私は、今より少し若かったころ、宝石箱ほうせきばこのかぎをなくしました。そこで、新しいかぎを作らせました。ところが、あとになって、古いかぎが見つかったのです。私はどちらのかぎを選えらべばいいでしょう」

お客がいました。

「古いかぎをお選びになるとよろしい。そのほうがかぎあなによく合うし、あなたもよくなじんでおられるでしょう」

王子は立ちあがってオーバーン・メアリーのそばに行き、

「これが私のほんとうの花嫁です。自分の命もかえりみず、私をすくってくれた巨人の娘オーバーン・メアリーです。この人よりほかに私の妻はおりません」といいました。

王子はオーバーン・メアリーと結婚し、お祝いわいはいつまでもつづきました。でも、私がもらったものは、まっかに燃もえる石炭にぬりつけたバターと、ざるに入れたおかゆだけ。あげくに川へ水くみに行かされて、紙のくつはとけておしまい。

村上郁再話

資料 『CELTIC FAIRY TALES』 JOSEPH JACOBS